

火と氷のシヤスタ山

小島烏水

青空文庫

山仲間から、アメリカで好きな山は何か、と聞かれると、一番先^さきに頭に浮ぶのは、シヤスタ山である。がそれは必ずしも、好きであるからではない、位置が南に偏^{かたよ}り過ぎて、雪が早く融けるし、氷河は小^ちッぽけな塊^{かたまり}に過^{かたまり}ぎないし、富士山のように、新火山岩で、砂礫^{されき}や岩石が崩れ易^{やす}いので、高山植物は稀薄であるし、「好き」になるところまでは行かないが、それでも、最も多く心を惹^ひかれる山である。何故^{なぜ}というに、キャリフォルニアからオレゴン州への、境近い街道に、山が聳^{そび}えて、複式二重の成層火山、シヤスタとシヤスチナと、二人の容姿端麗なる姉妹が、見る角度に依^よつては、並んで手を繋^{つな}ぎ合つてもいるし、また背中合せに丈^{たけ}

くらべをしているようでもあり、何となく人懐かしい山に見えるからである。その麓ふもとを汽車が通っていることは、丁度富士山の裾すそを、御殿場から佐野（今は「裾野」駅すその）、三島、沼津と、廻まわつて行くようで、しかも東海道が古くからの宿駅であるように、シヤスタ山麓さんろくの村落も、街道も、一八四八年以後の、米国西海岸への移民時代には、ある時には、印度人と白人とが必死になつて闘ことつたり、殊に一八五一年、シヤスタ山から、三十五哩マイル離れたワイレカというところに、金鉱が発見されてからは、成金なりきんを夢見る山師たちが、鶴嘴つるはしをかついで、ほうほうたる髯ひげづら面を炎熱に晒さらして、野鼠の群のように通行したところで、今では御伽話おとぎばなしか、英雄譚えいゆうたんの古い舞台になっている。かつて桑港サンフランシスコの古本屋

で見たその頃の石版画に、シヤスタ火山が、虚空^{こくう}に抛^なげられた白
炎のように、盛り上っている下を、二頭立ちの箱馬車が、のろく
さと這^はいずって、箱の中には、旅の家族とおぼしい女交りの一連
が、窮窟^{きうくつ}そうにギツシリ詰まっているが、屋根の上にはチョッキ
一枚になって、シガアを燻^{くゆ}らしている荒くれ男たちが、不行儀に、
臀^{しり}や脛^{すね}をむき出しに、寝そべっているところを描いたのがあつた
が、延^のびりとした大陸性の、高原に引く一筋路を、澄み切った
大空の下に、おそらく、ガタピシと石ころに蹴^けつまずきながら、
走って行く一台の馬車は、漂泊の姿そのもののように、一^{いちまつ}抹^{まつ}の
旅愁を引くのに充分であつた。

それは、カウボーイの土地である。未だ草分け時代の空氣が、

澱^{よど}んでいる。石と打^ぶつかつても、林に這^{はい}入つても、人と自然が肉迫するときのいきりが立つている。そのすべてを超越して、美しいものは、この山の隆々たる肉塊である。新火山のことだから、土の締まりは、しっくりしていない、むしろ危ツかしいほど、柔^じゆうぜい脆^{はい}の肉つきではあるが、楽^{らく}焼^{やき}の陶器のような、粗朴^{うわぐ}な釉^{ゆう}す^{すり}薬^{すり}を、うツすり刷^はいた赤^{あか}る味^みと、火力の衰えた痕^{あと}のほてりを残して、内へ内へと熱を含むほど、外へ外へと迫つて来る力が、十^じつぽう^{つぽう}方^{むしようげ}無^む障^{しょう}碍^{がい}に放射することを感じる。絶頂の火口は、今こそ休火山ではあるが、烈々と美を噴く熔炉になっている。その美の泉を結晶したものは、絶頂から胸壁へと、こびりついているところの、氷河である。汽車の窓からも、その中の最大（といつても長

さは二哩^{マイル}半位しかないが）のホイットニイ氷河が、銀流しに光っているのが見える。そうして鉄路の附近に、氷河湖の跡が乾^ひからびて、今は青草の生えた牧場になって、牛が遊んでいる。その辺の農家の石垣は、氷河の推^おし流した堆^{たい}石^{せき}を使^{つか}ったりしているのが、私たち富士山で、万年雪を物色したり、日本アルプスで、「カアル」の痕^{あと}を、氷河時代の遺蹟^{いな}か否かと、論じ合ったりしている手合いに、いかに珍しかったろうか。

その氷河で思い出したが、私が ^{サンフランシスコ} 桑 港 にいるとき、一九

二四年九月十八日の夕、新聞の号外売りが、声高く「ラッセン火山大爆裂、シヤスタ氷河大融解」と、大の字^づ尽くしで呼んでいるので、耳寄りに思つて買つて見ると、いかにもシヤスタ山の、氷

河融解、大洪水来と、拳大こぶだいの活字で見出しがついている。それは同日付け、ダンスミールからの電報で、「シヤスタの南東頂上が欠損けっそんしてマツク・クラウド谷が吹き飛ばされ、谷の痕跡こんせきが、一筋も残らない」などと、誇張した報道であつたが、事實は、その前年の冬に雪が少なかったので、氷河は既に五月の始めに、新雪から解放せられ、底部から溶解して、空洞になり、激しい滝水で、氷河のトンネルが出来たのが、支持の力を失つて、崩落ほうらくを始め、岩石や砂礫されきを押し流して、山麓の村々へと、冠かぶせて来たのであつたが、その当時、村では、二、三分ごとに、太砲の音のよな響きが聞え、氷河を源とするマツク・クラウド河は勿論もちろん、サクラメント河まで水色が一変して、当分は濁りがつづいたとい

うことであつた。私は、その夕、電燈煌々こうこうとして自動車の目まぐるしく飛び交う賑にぎやかな町中で、一枚の号外を握つて、地質時代の出来事であるところの、氷河退却時代が、眼まのあたりに見られるのだと思つた。飛び廻る自動車も、忙しそうに歩く行人も、右往左往に悲叫ひきよう遁走とんそうする、あらゆる生物の、混乱の姿でもあるかのように取られた。

それから私は思う、外国の山を見るには、二つの見方が、経験されはしまいか、即ち自分の国の自然に似ている方面と、似ていない方面との二つである。蕪村であつたか誰だったか、「花はないば茨ら故郷の路に似たるかな」は、似た方からの見方だ。その反対に、似ても似つかぬところに、新しい驚異の心を抱かれることも

ある。シヤスタに就いて言うと、氷河地形などは、我が富士山とは似ない方面だが、その他に於て、多くの似顔は、合せ鏡をしてゐる姉妹でもあるかの如くに感じられる、そう思うとき、我々日本人に取つて、シヤスタ山は、もう錠前おろを卸した山ではなくなつた。

私の観察したシヤスタを、漢文者流の口調を借りて、人間本位で言うならば、とにかく不遇の山水である。第一にシヤスタ山は、太平洋沿岸に近い山としては、早く発見された方ではない。同じ太平洋岸でも、有名な航海者「ヴァンクウバア」が、フツド火山や、ベエカア火山や、レイニア火山を発見してから、三十四年も後に、シヤスタは、やっと存在を認められた。西班牙スペインの探検者

たちが、加州にシエラ・ネヴァダ山脈を見つけたよりも、三世紀も遅れている。メキシコの大火山、ポポカテペトルの第一登山が報告されてから、三百年も後になって、シヤスタは地図の上に戸籍が入った。しかし始めて登られたのは、一八五二年のことで、この辺の山としては、遅い方でもなかったが、あとから探検された他州（ワシントン州）の、レイニア山の方に国立公園を取られてしまい、レイニア山に関しては、詳細なる地形図、地質図や、一般民衆向きの、要領を得た説明案内などが出版せられて、世の中に紹介されているが、シヤスタには、未だそういうものは、何にも出ていない（あたかも富士山が「天地の別れし時ゆ神さびて」とか、古くから言われていながら、今日では、ややともする

と、最近発見の日本アルプス上高地あたりに、国立公園を、お先に奪われそうな形勢であるが如くに)。第二にシヤスタ山は、初めは海拔一万四千五百尺と測られて、米国最高の山と信ぜられていたのに、その方は、今では、シエラ・ネヴァダのマウント・ホイットニイに、最高の位置を取られてしまい、精密なる実測の結果は、一万四千一百尺に減じて、レイニアの一万四千四百尺に比してすら、下位に落ちてしまった(あたかも日本最高の富士山が、久しく信ぜられていた三七七八米^{メートル}突という高さ、最近実測の結果、たとい二米突ばかりにしてもかえって減少して、いよいよ台湾の新高山^{にいたかやま}の下位に落ちたように)。第三にレイニア山や、その属する所のキャスケード山脈を主として、探検する山

岳会には、「マザマ」（ポートランド市）があり、「マウンティニア」（シアトル市）があり、また南の方シエラ・ネヴァダを研究する山岳会としては、盛大なるシエラ山岳会（桑港）があるにもかかわらず、シヤスタはその中間に占居するため、どっちつかずの継子扱いを、^{ままこ}両方の山岳会から受けていること（あたかも日本アルプスや、秩父山脈が、登山家の興味の中心になって、離群別居の富士山が、大分閑却される傾向があるように）。第四は、山の不幸は、住人の不幸になって、シヤスタ山と、切っても切れぬ歴史中の人を、埋没しようとしている。即ちシヤスタ山を、世に紹介するために、全力を尽くした土地草分けのシッソン翁（J. H. Sisson）という開拓者のために、シッソンという地名が出来、

同名の停車場まであつたのが、いつの間にか、土地がシヤスタ・シチイと改名せられて、あたらしツソン翁の名は、草葬そうもうの間に埋められようとしている（あたかも富士山の役えん行者ぎようじやの名が、今日忘れかけて、日本アルプスの先達、ガウランドだの、ウエストーンだのという名が、若い人たちの口の端に上るようになった如くに）。それから第五、第六の「あたかも」が、未だ続いて挙げられるが、もうその点は打ち切つて、私たち同行四人が、シヤスタ山に登つたのは、大正八年（一九一九年）九月十一日のことで、未だこの山の草分けを記念するための、シツソンの名が残つていた時分であつた。その頃、シヤスタに登る人は、一と夏を通して、百人か百五十人位と登録せられていたし、殊に日本人の登

山としては、私たちが初めてのものであった（前に日本人が登っていたという記録があるならば、是非^{ぜひ}知らせていただきたい）。その私たちの登山にしてからが、時間不足のために、絶頂の剣ヶ峰ともいふべき、シヤスタ・ピークまでは、達しなかったのだから、一個の予察地形図をスケッチしたぐらいの、軽い気分で読んでいただきたい、何も登山記だからと言って、死に身になってコチコチと緊張しなければならない、というものでもなかろう。

シヤスタへ行くには、私たちの居住地、桑港から、オレゴンへと北向する南太平洋鉄道の便を借りるのである。汽車はサクラメントの大河に沿うて走る、川の底には、堅い凝灰岩などが露出しているが、シヤスタを距^{へだた}ること、五十哩^{マイル}位のところから、熔岩が、

兩岸に段丘テレースを作っている。そして段丘の上に、小舎が建てられ
 たり、馬鈴薯や唐黍とうきびが植えられたりして、この辺の畑としては、
 手入れが届いている。その熔岩は、シヤスタの南麓から迸ほとばしつたの
 であるが、ちよつと富士山から、桂川に沿うて猿橋まで達してい
 るところの「猿橋熔岩」に似ている。しかし猿橋の方では、熔岩
 の延長八里ぐらいで、厚さも今日見らるるところでは、四、五米メ
 突トばかりの薄い皮であるが、サクラメントへ流れるシヤスタ熔
 岩の厚さは、五十呎フイートから二、三百呎に達している。川上の方へ
 「シヤスタ」が、白い炎を爛らんらん々と光らして、汽車の窓から、大
 抵は右に見えるが、「左富士」のように、左に見えることもある、
 それほど川は、S字の環を繋つなぎ合っている。前に述べたシツソン

の停車場へ着くまでには、ダンスミールという、材木を伐り出す
ので賑やかな古駅があり、その次には、シヤスタ・スプリングと
いって、シヤスタ火山の基盤熔岩なる岸壁の間から、地下の伏流
が、富士の白糸の滝のように、千筋とまでは行かなくとも、繊細
な糸を捌いて、たぎり落ちるところもある、「花茨故郷の路
に似たるかな」が、ますます思い出される。

シツソンという寂しい停車場は、富士ならば、御殿場駅に当る
ところであるが、この方面から見たシヤスタは、一座の尖れる火
山にしか見えない、それが、シヤスタの主峰であるが、汽車が北
へ廻るに随って、いつの間にか、主峰の傍に、また一つの同じよ
うな火山が出て来る、それはシヤスタで、高さは日本の富士山

と同じく、一万二千三百尺であるが、シヤスタ主峰は、それよりも更に、約二千尺高く、海拔一万四千百六十二尺と註せられてい^{さら}る。火口は、シヤスタに一つ、シヤスチナに一つ、その双峰^{そうほう}を繋ぎ^{つな}合わせるころの、プラットフォームにも、一つあるという話であるが、私はそれをよく知らない。シヤスチナは、多分側火山として噴出したのが、一体の双生児のように、シヤスタと癒合^{ゆごう}したのでらうと思う。成立の原因は違つても、富士の愛鷹^{あしたかやま}山の頂上部が、仮に爆裂飛散せずに原形を保存していたとすれば、シヤスチナ位になっているかも知れない。

だが、シツソン、ウイードあたりから、仰ぎ見るシヤスタの偉大さは、アルプス式の山々に見ることの出来ない鮮明美がある、

孤にして閑である、独にして秀で、単にして完き姿である。^{まつた}日本
 アルプスでも、そうであるが、アルプス式の山は、高台の上に乗
 っかつて、群峰になつてゐるから、槍ヶ岳とか「マツタアホルン」
 とかいう特異の山形を除いたら、遠くからは、どれがどれやら、
 個々の山名がちよつと解り兼ねる場合もあるが、シヤスタはそう
 でない、富士もそうである如く、一見分^{ぶんみよう}明である、足許^{あしもと}か
 ら山上までの直径の高さは、モン・ブラン以上である（移民時代
 の一愛山家は、「シヤスタに登つてモン・ブランを笑つてやれ」
 と言つた）。その立体構成面の威嚇^{いかく}的偉大さを、駭^{おどろ}くべき簡単な
 る曲線で、統整して、しかも委曲に至つては、富士で謂^いうところ
 の八百八谷の線から、おのずと発生する凹凸面の、複雑なる入り

乱れのために、眼もあやになることを如何^{いかん}ともしがたい。

私たち一行四人は、九月九日の夕、シツソンに着いて、駅前のパーク・ホテルというのに泊った、目ぼしい商家といつては、よろず屋風の荒物屋と、鍛冶^{かじ}屋があるくらいのもので、私は靴屋に案内してもらい、氷河に^{すべ}にらない用心に、裏皮を貼^はりつけて、釘^{くぎ}を打ってもらったが、旧式の轆轤^{ろくろ}を使って、靴屋のおやじが、シユツ、シユツと、線香花火式にやってくれた。登山の準備をしたくも、碌^{ろく}なものがないところで、この節の日本アルプスの登山口の、設備の方が、よほど行き届いているくらいだから、その貧弱さの、見当がつくであらう。

山麓帯の裾野で、日に焼けて、疲労をひどくしたくないので、

定めの行程は短いにもかかわらず、翌十日は朝しゅったつ立した、馬を五頭、一頭は荷物を積んで、案内者の、チャアルス・グーチという男が、裸馬に乗り、アルペン杖を横たえながら、片手で荷馬車を曳ひいて先登に立つて行く。私は馬に慣れないので、少なからず閉口したが、同行中の神田憲君は、この仲間では馬術の達人で、ややともすれば遅れがちな私の馬の綱を、時々引いてくれた。

本街道から製材所の横を切れると、もう既に裾野であるが、富士のそれとは違って、乾かわき切った砂漠で、セージと通称する白ツ茶けた草や、マンザニタと呼ばれるところの、灌かんぼく木などが茂つて、馬蹄の砂が濛もうもう々と舞いあがるのには、馬上面おもてを伏せて、眼をねぶるばかりであつた。

それでも、森林帯に入るときさすがに涼しい、中でもシヤスタ^{もみ}樅と呼ばれる喬^{きよう}木^{ぼく}の一種は、この山、特有とまでゆかなくても、この山の産として最も名高いのであるが、富士の落葉^{からまつ}松を、富士松と呼ぶたぐいであるかも知れない。なお登ると、俗にホワイト・バーク・パイン（白皮松）と呼ぶ喬木が出てくる、高さは二百尺位に達するのは珍らしくはない。土地の人たちは、この森林帯の立派さを艶^{えん}説^{ぜつ}しているが、レイニア火山や、ベエカア火山の、それに競べると、さほどの物ではない。ホールス・キャンプという平地に出で馬を下り、野營の仕度をする、海拔九千尺、水も少しはある。今は（一九二二年の春から）このところに「シヤスタ・アルパイン・ロッジ」という、立派な山小舎が建設された

そうで、毎年六月十五日から九月十五日まで「小舎開き」をやつて、一年に四、五百人の宿泊者は、欠かさないという話であるが、私たちの登った頃には未だ小舎はなく、シエラ山岳会考案の「睡眠袋」を馬に積ませて来たので、蓑虫みのむしのように、その中にすっぽり潜り込んで寝たが、乾き切った小石交りの砂地の上で、日本アルプスのように、柔らかい草原しとねを褥にする贅沢ぜいたくは、思いも寄らず、睡眠不足が祟たたつて、翌あくる日の登山には、大分こたえた。

森林帯の尽きるところから、大雪溪が始まるが、この雪溪の長々しい傾斜は、さすがに白馬岳あたりの比ではない。翌くる十一日の朝、一行はこの単調の雪溪を、のたり、のたりと登って、巨大な堆石たいせきを戴いた雪の「テーブル」の側へ立って写真を撮った

り、雪の穴ぼこの中へ、更紗さらしやの紋でも切り簞はめたように、小さい翼を休めているところの、可憐かれんなる高山蝶を、いじくつたりして、雪渓を、ものの三千五百尺ばかり登ると、富士山の胸突八丁にもたと喩えられるところの、火口壁へとぶつかった。これを越えると、絶頂たどに辿りつくことになるので、ここでさえ、高さは一万三千尺近い見当である。最後の噴火のあつたという「レッド・ブラッフ」の赭あから岩が、眉まゆを焦こがすばかりに、近く聳そびえている。足許あしもと一面に、熔岩や、焼石が狼藉ろうぜきして、歩きにくい。生憎あいにく時計を見ると、かれこれ午後二時に近い、空気も稀薄になり始めて、絶頂まで、遅々ちちたる足取りでは、今夜中にホテルまで、戻り得られるか否かも、覚束おぼつかないので、ここから下山することにした。

シヤスタへの登路は、氷河踏査を主とするならば、私たちの路を取らずに、南のマツク・クラウド村から登るか、またはやや北行して、シヤスタとシヤスチナ間の、窪地くぼちを目指して登る方が、よかったということを、後から聞かされた。後の路を取れば、九千尺の高度から、ホイットニイ氷河の末端が出現して、「クレツヴァス」や、堆石の状態がよく判明するということであつた。

登山記としては、これだけだ。短くして、呆氣あつけないのは、私も知っている、しかしシヤスタ山は、我が富士山の如く、登る山であるが、同時に眺望する山だ。この山を中心にして、周囲の展望は変化する、大空へ掛けた額面として、横から見たり、裏返しに見られる山だ。

私は、その後、幾回となく、山麓を通過した、半周した、約四分の三まで廻まわった。かくて視みたところを綜合して言えば、山の頸部は、三十五度の傾斜から、次第に緩和して二十度、十五度、十度と、延のびりした線を、大裾野へ引き落とし、末端は五度位にちぢんでいるが、富士山の如く、草山三里、木山三里、石山三里という割り当ては、シヤスタには応用出来ない。草山は、まあいいとして、木山はシヤスタでは、谷地帯やちたいになつているし、殊ことに石山に該当するところは、万年雪と氷河の喰い込みで、岩頸がんけいは、麓へらでえぐつたように「サアク」の鈴成りが出来ているから、サアク帯と呼ぶ方が適當である、その「サアク」からは、言うまでもなく、氷河が流れていて、九千尺以上に五個あるという話であるが、

私の望んだのは、ホイットニイ氷河と、南方のマツク・クラウド氷河の二つである。前者は前にも述べた通り、シヤスタとシヤスタナの間の、鞍部あんぶに懸垂けんすいしているが、アルプスのベルニーズ・オーバアラント山地あたりの大氷河に比べると、恐らく雛形ひながたぐらいの小さいものだろうが、それでも擬似氷河ぎじではない。小さいなりに、完全な真氷河であることは、「クレツヴァス」の凹凸おうとつが、かなりの遠くから肉眼でもハッキリと見えるし、大氷河でなくでは、滅多に見られないところの、側堆石までを具備しているのでも伺われる、終堆石しゅうたいせきは弦の切れた半弓を掛けたように、針葉樹帯の上に、鮮明に懸かかっているのみならず、そこから流下した堆石は、累々として、山麓さんろくに土堤を高く築いている。ただ

巨大な堆石が、現在見当らないのは、何分にも、氷河が小さく、谷の削り方も浅くて、「剥^はぎ取り」が、深く利^きかないためである。もう一つのマツク・クラウド氷河の方は、現在では最小の氷河であるが、山麓同名の村に、「マツド・クリーク」という小流があつて、その岩壁には、氷河の引ッ搔^かいた条^{じょう}痕^{こん}が、鮮明に残つているところを見ると、昔は今よりも、大きな氷河であつたらしいことを示している。

要するに、シヤスタの氷河は、この山の属するキャスケード山脈の最南端だけあつて、キャスケードの氷河としては、一番小さいものであることに疑いはないが、仮に、富士山の氷河が成立したとしたら、あるいはまた、日本アルプスの剣岳や立山群峰が、

もう五百米メートル突も高く、氷河の小塊が出来るという想像が、容れられるとしたら、まあこんなものだろうと推測せられるだけに、何となく、捨てがたく思われるのである。

ここで、冒頭に戻って同じ言葉を繰り返かえす、アメリカで好きな山は何かと聞かれると、一番先きに頭に浮ぶのは、シヤスタ山である、それは必ずしも、好きであるからではないが、最も多く心を惹ひかれる山であると。

終りに、この一文を、同行四人の中、馬術の達人であつた神田憲君の霊れい前ぜんに献ささげる。同君は、その後帰朝して、過般の大震災で、鎌倉で圧死あつしの不幸に遭あわれた、他の二人は、野坂滋明君と国府精一君とである、今は米国と日本に別れていて、共に健在であ

る。

青空文庫情報

底本：「山の旅 明治・大正篇」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年9月17日第1刷発行

2004（平成16）年2月14日第3刷発行

底本の親本：「改造」

1929（昭和4）年7月

初出：「改造」

1929（昭和4）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時には副題「富士山との比較考察」がありました。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年2月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火と氷のシャスタ山

小島烏水

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>